

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（生）甲第293号	氏名	砂崎素子
学位審査委員		主査 菅原潤 副査 佐久間正 副査 谷村賢治	
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>砂崎素子氏は、2009年4月に長崎大学大学院生産科学研究科博士後期課程に社会人学生として進学し、現在に至っている。同氏は、生産科学研究科に入学（進学）以降、環境科学を専攻して所定の単位を修得するとともに、毛氈製造に関する技術導入史に関する研究に従事し、その成果を2012年12月に主論文「新資料からみた文化元年（1804）長崎における毛氈製造の技術導入」として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文2編（うち審査付き論文2編）、学位の基礎となる論文3編（うち審査付き論文0編）を付して、博士（学術）の学位の申請をした。長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、2012年12月19日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を2013年2月20日の生産科学研究科教授会に報告した。</p> <p>本論文は新たに長崎歴史文化博物館に寄贈された笹山家旧蔵本を調査することで、これまで国立国会図書館等に所蔵される資料に基づいてその製造の意図が推定された毛氈の技術導入の時期とその意図を考察した。その結果、毛氈製造の技術導入が毛織物の技術移転と同一視する通説を修正すべきだと考えた。つまり清国から導入した製造および染色技術は毛織とは関係ないのに対し、オランダには毛織の織技術および染色技術の導入を終始求めていることからこれは明らかであり、また寛政年間の長崎貿易改正後の輸入動態を見ても裏付けることができる。</p> <p>以上のように本論文は、これまで毛氈と毛織物の区別のなされないまま等閑視された我が国における毛氈導入の時期とその意図を確定したものとして、今後の服飾史研究に関して多大の寄与をするものと評価できる。</p> <p>学位審査委員会は、環境科学の分野において極めて有益な成果を得るとともに、服飾史の進歩発展に貢献するところが大きく、博士（学術）の学位に値するものとして合格と判定した。</p>			